



Enterprise Architect 11.0/11.1 feature guide

---

*by SparxSystems Japan*

**Enterprise Architect 11.0/11.1 機能ガイド**

(2014/08/18 最終更新)



このドキュメントでは、Enterprise Architect 11.0 および 11.1 で追加・改善される機能についてご紹介します。特に名気のない項目は、バージョン 11.0 での追加機能です。青字の文字は操作方法を示しています。

なお、いくつかの機能は利用できるエディションが限られるものもあります。ご注意ください。

### バージョン 10.0 までの Enterprise Architect をご利用のお客様へのお知らせ

日本語版以外の Enterprise Architect との互換性確保のため、内部データの保存形式を 1 カ所変更しました。バージョン 10.0 以前のバージョンで作成したデータはパッチの適用が必要です。

- ▶ バージョン 10.0 までの Enterprise Architect で作成したシーケンス図の「非同期」メッセージは、バージョン 11.0 以降で内容を表示すると、通常のメッセージとして表示されてしまいます。パッチを 1 回適用すれば、正しく非同期メッセージとして表示されます。なお、パッチの適用後は、過去のバージョンで開いた場合、非同期メッセージは同期メッセージとして表示されます。パッチの適用手順は、Enterprise Architect のヘルプファイルの「非同期のメッセージに対するパッチ」のページをご覧ください。

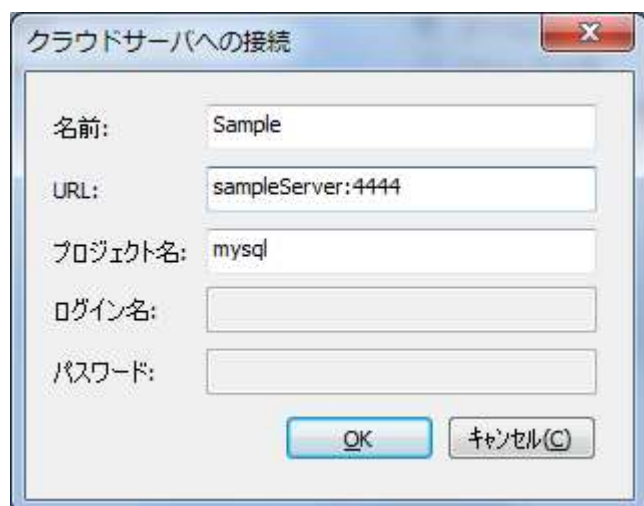
また、セキュリティ強化の一環で、セキュリティ(アクセス権)機能を利用している場合のユーザーごとのパスワードの保存形式(暗号化形式)を変更しました。バージョン 11.0 以降でプロジェクトを開くと、自動的にこの形式の変換処理が行われます。変換処理が行われた以降は、バージョン 10.0 以前のバージョンでは、プロジェクトにログインできなくなります。

## 複数拠点・分散設計への対応強化

複数拠点で Enterprise Architect を利用し、分散して設計する場合に役に立つ、「クラウドサーバ機能」・「パッケージリポジトリ機能」および「ディスカッション機能」を追加しました。

クラウドサーバ機能は、従来の DBMS リポジトリ機能を拡張し、外部に存在するサーバを容易に利用するための機能です。接続する Enterprise Architect 側には ODBC ドライバのインストールなどの設定は不要で、サーバの IP アドレス(あるいは名前)とパスワードなどを入力するだけで、外部のサーバを利用できます。また、通信方式として HTTP や HTTPS を利用することもできます。クラウドサーバ機能は、Enterprise Architect コーポレート版で利用できます。

(「クラウド」という名前が付いていますが、組織内部のサーバなど、外部に公開されていない環境・サーバでの利用も可能です。)



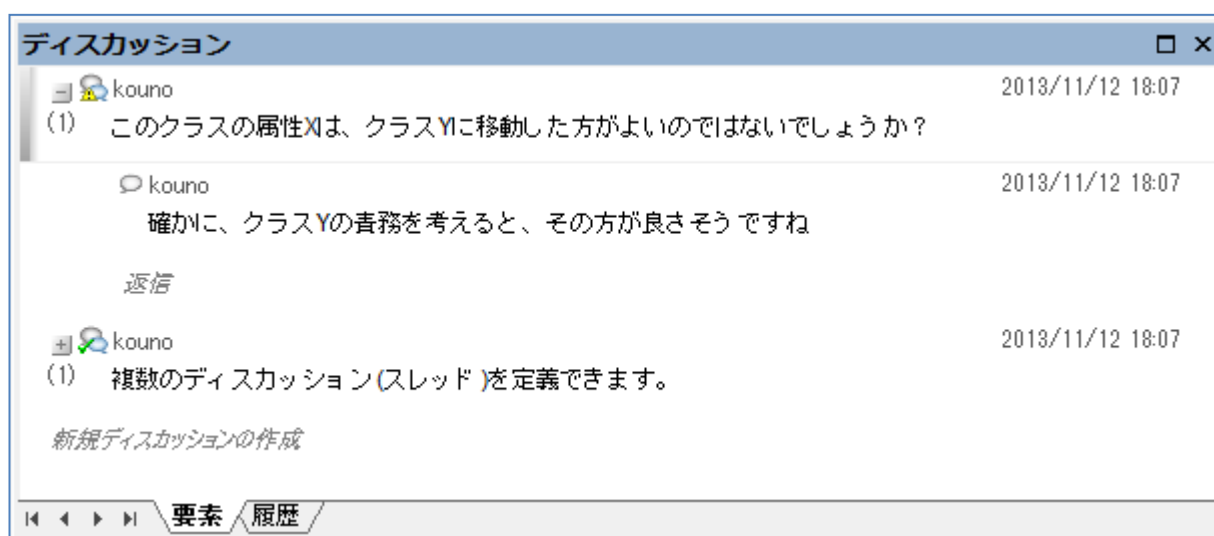
パッケージリポジトリ機能は、モデル内のパッケージを分散環境間でやりとりする場合に便利な機能です。従来、モデルの情報をやりとりする場合、XMI ファイルとしてモデルの情報を渡す必要がありました。この新しい機能を利用すると、パッケージをクラウドサーバ上のストレージに格納し、他の人が簡単に取得することができます。取得する際に、依存関係のあるパッケージや利用している MDG テクノロジーなどを自動的に判別し、不足する内容がある場合には合わせて取得できます。

(メインメニューから「プロジェクト」→「パッケージリポジトリ」)

なお、リポジトリについては、取得・編集(更新)のそれぞれにパスワードを設定できますので、パスワードを知っている人のみがパッケージを取得したり、更新したりできるように制限することができます。この機能はクラウドサーバ機能の利用が必須です。(クラウドサーバ上のみ、リポジトリを作成できます。) そのため、この機能も Enterprise Architect コーポレート版で利用できます。

ディスカッション機能は、モデル内のそれぞれの要素に対してコメントをつけたり、そのコメントに返信したりすることができる機能です。モデルについての議論・メモに有用です。

(メインメニューから「要素」→「ディスカッション」)



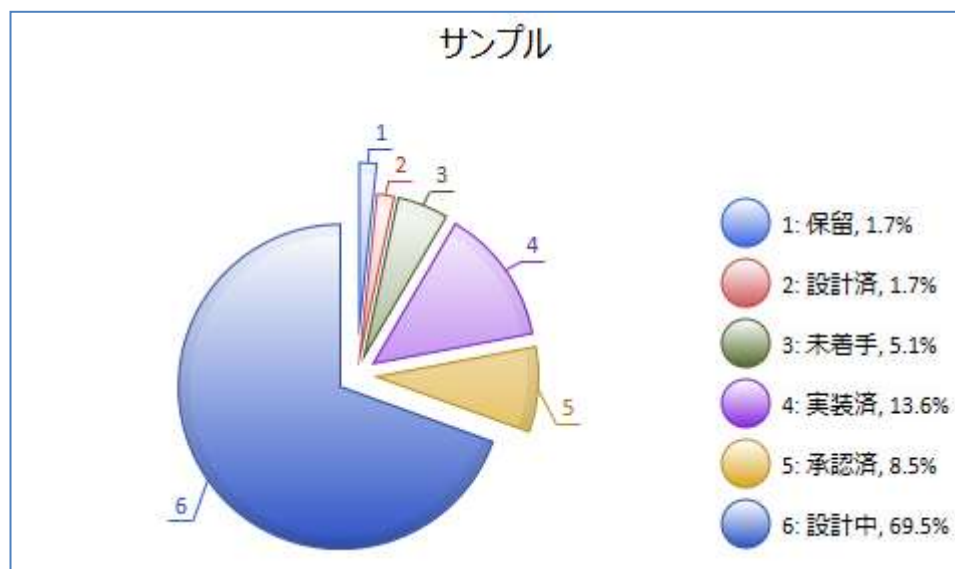
ディスカッション機能で記録された内容は、検索の対象にもなります。ディスカッションに関連する検索ルール「最近更新されたディスカッション」「最近の投稿」が利用できます。

## ダッシュボード

Enterprise Architect のモデルの内容について様々な情報を表示する「ダッシュボード」を構築するための要素を追加しました。具体的には、チャート要素・時系列チャート要素・一覧オブジェクト要素が追加されました。

チャート要素を利用すると、モデル内の要素について、特定の属性についてチャートで個数・割合を表示することができます。例えば、要素の「状態」ごとの分布を、円グラフや棒グラフで表示できます。特定のパッケージ内のみを対象にすることもできます。

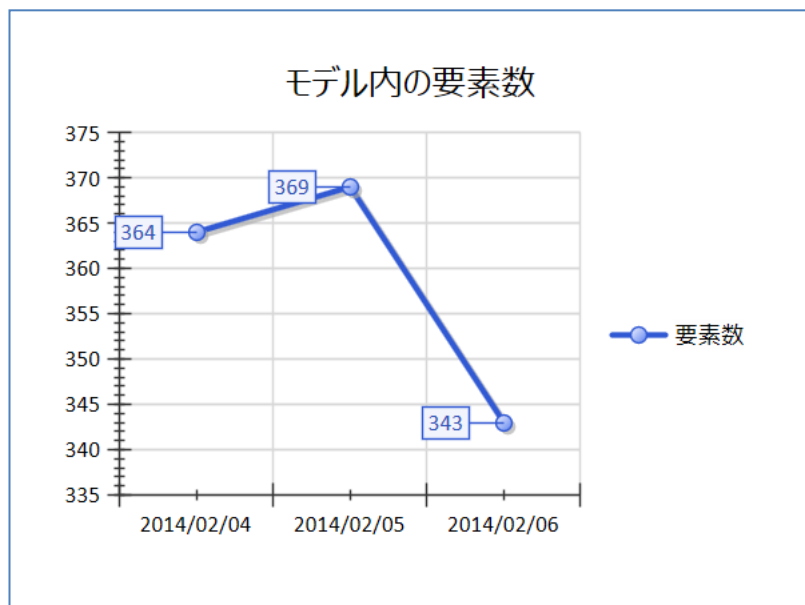
また、CSV 形式で固定の値を入力し、その内容をグラフにすることもできますので、UML で表現しにくい内容をグラフとして表現する場合にも利用できます。



チャートは、要素としてダイアグラム内に配置する形になります。そのため、RTF ドキュメントや HTML ドキュメントに含めることも容易にできます。

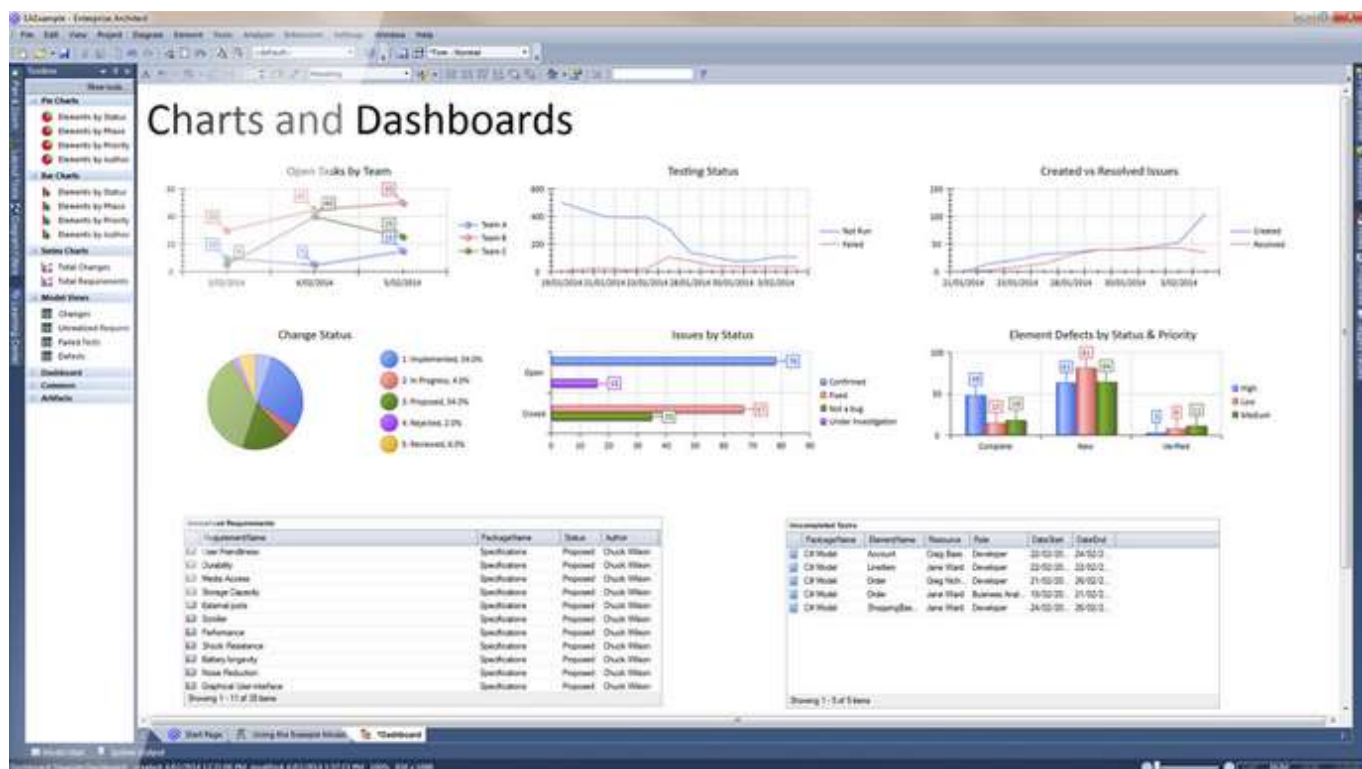
(「拡張要素」ツールボックス内の「チャート」要素をダイアグラム内にドロップして下さい。ダブルクリックすると表示されるプロパティ画面の「チャートの設定」グループから対象の要素や形を変えることができます。)

時系列チャート要素は、指定した条件を満たす要素の個数を、自動あるいは手動で記録し、グラフとして表現する機能です。たとえば、要素の個数の遷移をグラフとして表現し、設計の進捗状況の把握の助けとすることができます。



(「拡張要素」ツールボックス内の「時系列チャート」要素をダイアグラム内にドロップして下さい。ダブルクリックすると表示されるプロパティ画面の「チャートの設定」グループから計算式やグラフの形を変えることができます。)

これらの要素を1つのダイアグラムに配置することで、「ダッシュボード」としてモデルの情報を把握するための情報源とすることができます。



ファイル形式での管理について、**Firebird** 形式への対応

従来のファイル形式である EAP ファイルは、Microsoft の JET データベースエンジン (Microsoft Access 97 ~ 2003 のエンジン) のファイルでした。このファイル形式は扱いが容易で処理速度が速い反面、堅牢性に欠けるなどのさまざまな問題がありました。JET データベースエンジンはバージョン 4.0 で開発が終了し、現在存在するさまざまなバグの修正は今後も行われなようです。

こうした背景もあり、EAP ファイルに加えて、新たに拡張子 FEAP のファイルが利用できるようになります。こちらは、Firebird データベースエンジンの形式のファイルです。この FEAP ファイルも、EAP ファイル同様に単一のファイル内にすべてのモデル情報が格納されますので、扱いが容易です。

バージョン 11.0 では、プロジェクトファイルを新規に作成する際の既定値は EAP ファイルのままとなります。新規作成時の拡張子として FEAP を選択すると、Firebird 形式のファイルになります。既存の EAP ファイルの内容は、プロジェクトの転送機能を利用することで、FEAP ファイルに内容を転送することができます。(転送先となる FEAP ファイルは、Enterprise Architect のインストールディレクトリにある「EABase.FEAP」ファイルをコピーしてご利用下さい。)

なお、ネットワークドライブに配置した FEAP ファイルを開くことはできません。FEAP ファイルを利用し、プロジェクトの内容を共有したい場合には、バージョン管理機能を利用してプロジェクトの内容を共有してください。

## シミュレーション機能の強化

シミュレーション機能について、以下の点を強化しました。

- ・ ステートマシン図から自動生成したソースコードと連携し、デバッグ版で実行している内容と連動してシミュレーションを実行することができるようになりました。  
(従来の JavaScript を利用した形式だけでなく、C 言語や C++ 言語で処理内容を記述した場合にも、Windows 環境で動作するのであればモデルのシミュレーション機能が利用できるようになります。)
- ・ モデル内のクラス要素の定義からインスタンスを作成し、シミュレーション内で利用することができます。
- ・ 振る舞いの実行結果の戻り値をアクションピンとして表現し、別の振る舞いの入力値として渡すことができます。
- ・ シミュレーション機能呼び出すための API を追加しました。

## ビューの追加

バージョン 11.0 では、モデルの内容をさらに活用できる 2 つのビュー「仕様ビュー」「カンバン」を追加しました。

まず、従来の一覧形式をさらに強化した「仕様ビュー」を追加しました。仕様ビューには、指定したパッケージ内の指定した種類の要素が一覧形式で表示されます。列の内容として、従来の一覧ビューで表示可能な状態やバージョンなどのほか、テスト項目や付属ドキュメントなど、さまざまな情報の有無を確認できるように

なりました。また、情報が存在する場合に表示されるアイコンをクリックすることで、関係する情報を簡単に参照・編集することができます。

(メインメニューから「表示」→「仕様ビュー」)

クラス	状態	テスト	ファイル	ドキュメント	全ての内容
Dummy1 このクラスの説明文です。	設計中		📄		📄
Dummy2	実装済			📄	📄
Dummy3 ノートの内容を、仕様ビューから直接参照編集することができます。	承認済	✓	📄		✓ 📄

また、もう1つの「カンバン」ビューでは、事前に定義した枠内に要素を配置し、タスクの進捗状況を視覚的に確認・管理できるビューです。それぞれの枠には、対象となるプロパティを指定することができます。例えば、下記の例では枠に要素のプロパティの「状態」を結びつけています。カンバンのダイアグラム内で要素をドラッグ&ドロップして別の枠に移動すると、要素のプロパティの「状態」の値が自動的に変わります。

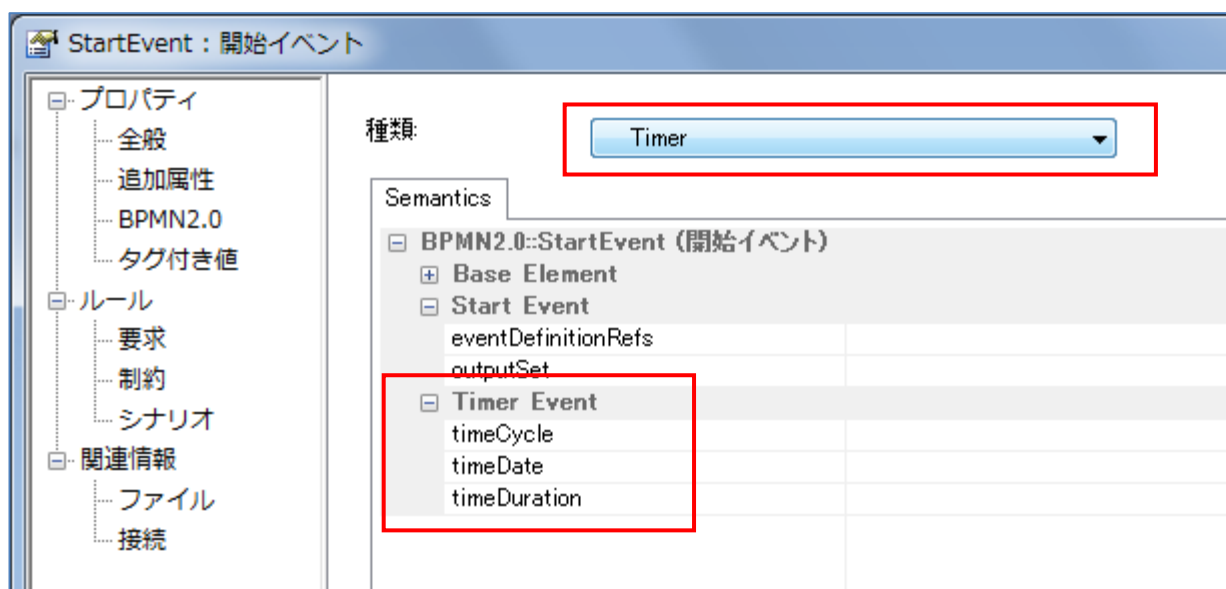
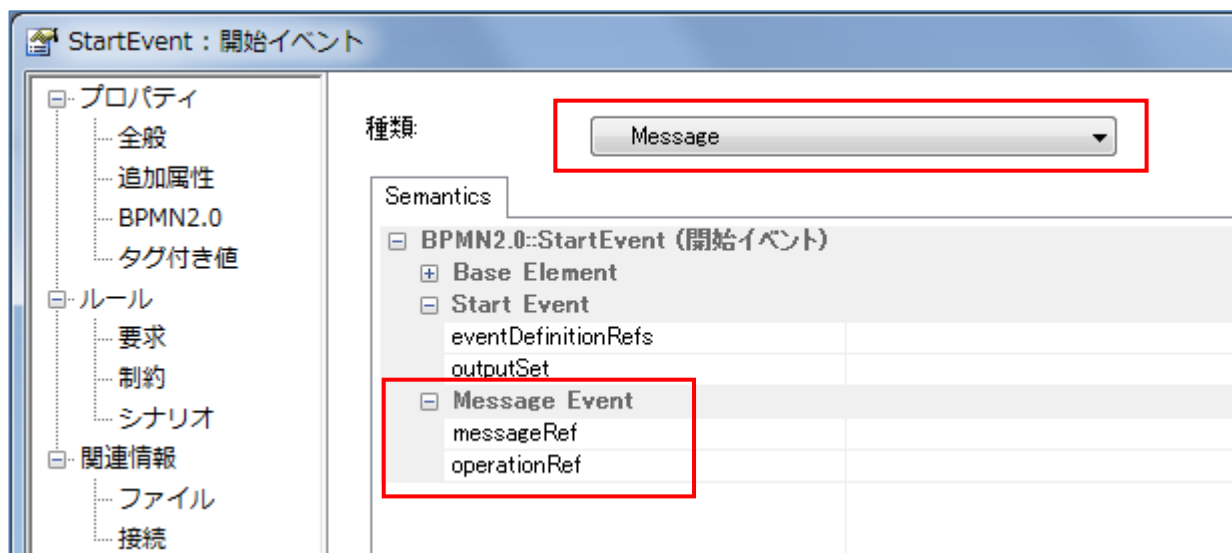
(メインメニューから「ダイアグラム」→「レーン・マトリックス・カンバン」)



## BPMN2.0 での動作の強化(バージョン 11.1)

BPMN2.0でのモデリングについて、さまざまな点で改善・強化を行いました。

その一例として、プロパティダイアログの改善が挙げられます。BPMNの要素をダブルクリックすると表示されるプロパティダイアログでは、その要素の種類に応じた設定可能な値を自動的に表示するようになりました。以下の画像の例は、開始イベントで、種類を「Message」と「Timer」に変更した場合の表示の違いを示しています。



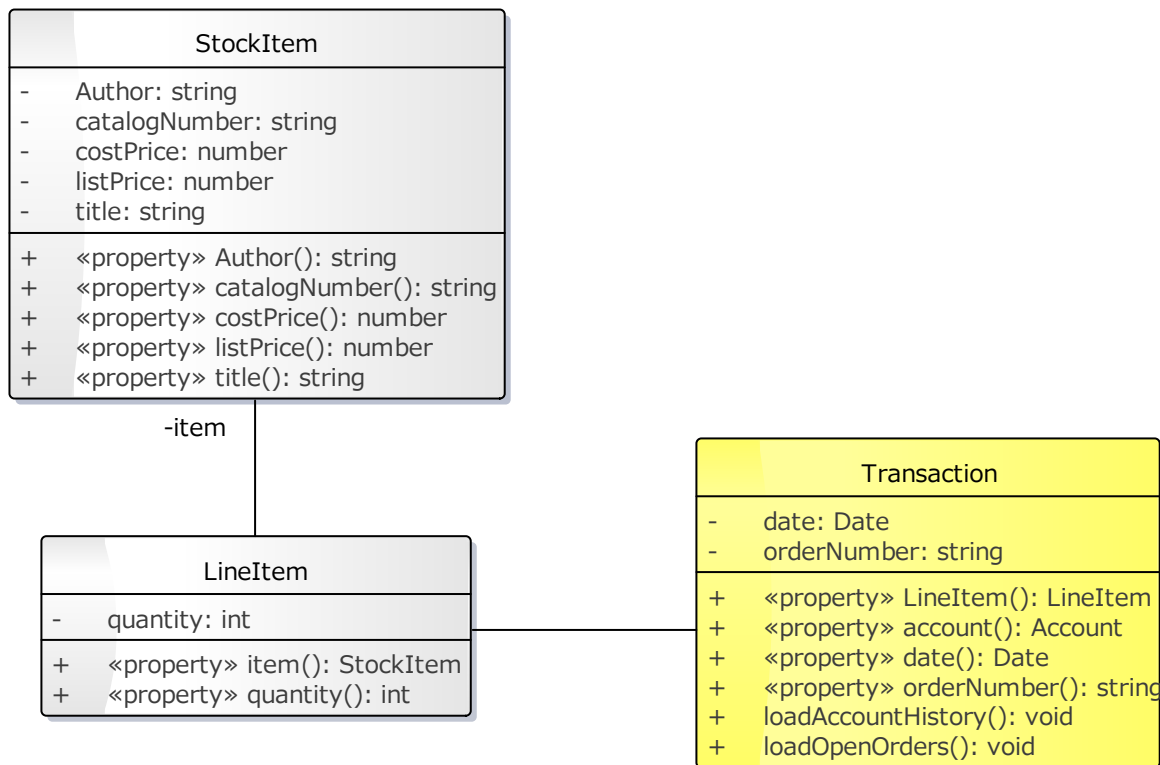
また、BPMN 2.0 XML ファイルの読み込みに対応したほか、BPMN 2.0 XML ファイルの出力について改善・強化しています。

## その他の変更・改善

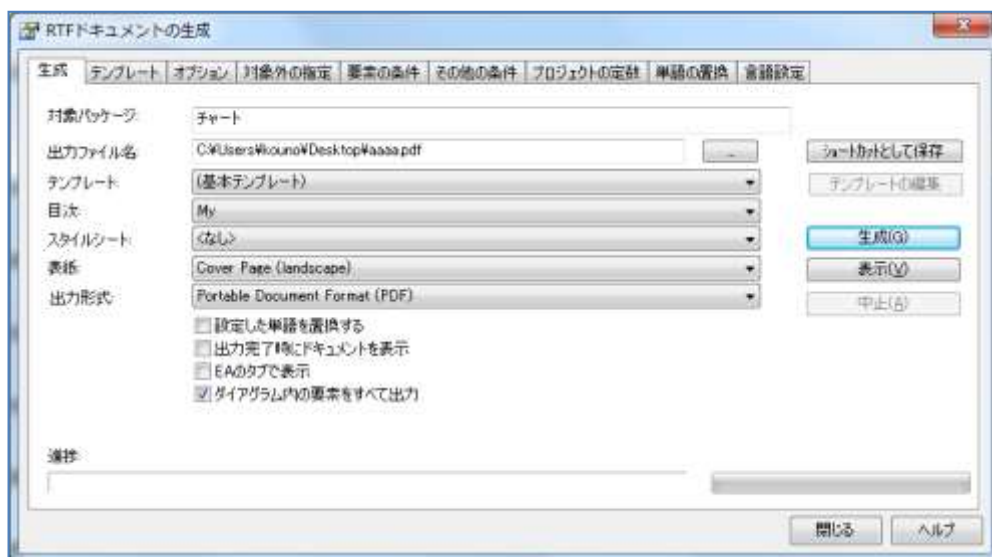
- ・ ダイアグラム内の表示形式を簡単に切り替えることができる「テーマ」機能を追加しました。また、ダイアグラムの背景として画像を指定したり、グラデーションの形式を変えたりするなどの、見た目のカスタマイズ機能を強化しました。また、描画に関するいくつかのオプションを追加しました。次の図は、新しい表示形式を適用した例です。

(オプション画面の「テーマ」グループから設定できます)





- RTF ドキュメントの生成機能で、「表紙」「目次」をテンプレートとは別に指定できるようになりました。



- ドキュメントの出力機能で、docx 機能での出力に対応しました。
- ステートマシン図からのソースコード生成で、並行状態や履歴などの状態に対応する、新しいテンプレートセットを追加しました。(今までのテンプレートも継続して利用可能です。)
- 64 ビットアプリケーションのデバッグ・シーケンス図の自動生成に対応しました。
- 既存のファイルをダイアグラム内にドロップした際に、ファイル本体をプロジェクト内に保存する機能を追加しました。これにより、さまざまなファイルをモデルと一緒に管理することが可能になります。
- ダイアグラム内に貼り付ける画像を透過させることができるようになりました。

- ・ NIEM(The National Information Exchange Model)のモデリングに対応しました。
- ・ OSLC(Open Service for Lifecycle Collaboration)のリソースプロバイダとして動作し、モデル内の要求要素の取得や更新・追加ができるようになりました。
- ・ アクションに対してデシジョンテーブルを定義できるようになりました。デシジョンテーブルは、OMG Decision Model and Notation の仕様を元にしています。  
(アクション要素を右クリック→「デシジョンテーブル」)
- ・ .RC 形式のリソースファイルからダイアログ定義の読み込みができるようになりました。読み込んだダイアログは Win32 ダイアログとしてモデルに活用できるほか、シミュレーション機能でも利用できます。  
(プロジェクトブラウザ内でパッケージを右クリック→「ソースコードの生成と読み込み」→「リソーススクリプトの読み込み」)
- ・ Windows 8.1 への正式対応バージョンです。
- ・ バージョン 11.0 から、Enterprise Architect デスクトップ版と MDG Technology for SysML の組み合わせで利用できるようになります。(従来はプロフェッショナル版以上が必要)  
また、パラメトリック図のシミュレーション機能は、バージョン 11.0 以降ではプロフェッショナル版以上で利用できるようになりました。

そのほか、300 項目以上の細かい改善やバグ修正が含まれています。